

望岳山荘

にて

中嶋嶺雄

多忙な日々にあっても、郷里のコミュニティ・ペーパーである本紙には必ず目を通す生活が続いている。スズキ・メソードの才能教育研究会関係の記事も多いし、北アルプスや松本平それに安曇野の自然にふれたカラー写真などに心が和むから

でもあるが、ときには本紙を切り抜いたりコピーをつくったりして、仕事の参考にすることもある。

今、私がかかわっていることの一つに、わが国の英語教育の在り方に関する審議会がある。具体的には中曽根文部大臣の諮問に^{たい}応えるための「英語指導方法等改善の推進に関する懇談会」であり、私はその座長の任を負っているのだが、このところ多くの専門家や識

者の参加を得て、毎回、実に活発な意見がたたかわされている。その点で、本紙四月三十日付「口差点」の



「英語と公用語」と題する浅田護氏の意見は貴重なものであったが、昨日(五月十六日)の懇談会の席では、本紙四月十九日付の「生

きた英語 伸び伸び」という波田小学校の「松風プラン」国際理解教育の記事をコピーして、北アルプス山麓の田舎での成功例

「生きた英語」と『市民タイムス』

として出席者全員と文部省の関係者にお配りし、審議の参考にさせていただいた。

い関連について、スズキ・メソードでの体験をふまえて発言した。まだ審議の途中であり、結論的なことを申し上げることはできな

いが、報道陣にも公開されている懇談会なので、マスコミの報道は素早く、今朝(十七日)の朝刊には「小1から英会話授業」などの見出しで「できるだけ早

い段階で、楽しみながら取り入れるように」意見が一致した旨が報じられていた。平成十四年度から導入される新しい学習指導要領の「総合的な学習の時間」を活用し、国際理解教育の一環として早い時期から英語に親しむのが効果的だ

という方向であるが、英語の指導方法に関しては、中学校、高校それぞれに大学入試と大学での英語教育に関して、抜本的な改善を必

要としている。とくに大学での英語教育に関しては「英語を学ぶ」ではなく、「英語で学ぶ」方向への転換が迫られているといえよう。

もとより、このような英語教育の改善と日本が英語を第二公用語にすべきかどうかの問題は、まったく別個の課題として、慎重に論じられねばならないと私は考えている。
(東京外国語大学長 松本市出身)